

**活 動
報 告**

中部大学国際関係学部主催

「国際理解短歌コンテスト」

青 木 澄 夫*

1. 国際理解短歌コンテスト実施までの経緯

2004年は、愛知県にとって国際化を推進する二つの大事業が実施される前年にあたっていた。言うまでもなく、大事業とは2005年2月の中部国際空港セントレアの開港と2005年3月から9月にかけて開催された万国博覧会「愛・地球博」である。

愛知県に位置する本学国際関係学部は、直接的にこれらプロジェクトに携わることはなかったが、国際問題を研究・教育する機関としてこれらの問題に関心していることはできない。地域への社会貢献は、今や大学の責務でもあり、国際化推進は本学部の目指すところでもある。

一方、少子化が進む中、本学部への志願者は減少傾向にあり、高校生を中心とする若年層の国際関係への関心を掘り起こす必要性も生じていた。

このような状況下、2004年6月に大学当局の意向を受け、宮本学部長、峯学科主任から私あてに何か対策を講じるようにとの指示がなされた。わずか2ヶ月前に本学に着任した筆者にとって、大学にもまだなじめず、教育すらままならない状況にあったが、それまでのサラリーマン時代の経験をもとにアイデアの検討を開始することにした。

本学部には国際関係学科と国際文化学科があり、2004年度から国際関係学科には国際政治経済と国際開発協力の2専攻が、また国際文化学科には国際比較社会、国際言語文化の2専攻が設置された。これら4専攻を網羅しつつ、一般社会に訴える方法としては、「国際理解」の文言を使用することが適当と判断し、候補案件として下記3案件を学部長に提案した。

〔1〕国際理解狂歌コンテスト

〔2〕国際理解創作童話もしくは紙芝居コンテスト

〔3〕国際理解手紙コンテスト

〔2〕の創作童話・紙芝居と〔3〕の手紙コンテストは、私が専門とする開発途上国を舞台にした童話や紙芝居の創作をイメージし、手紙コンテストも開発途上国の架空の友だちに手紙を書くというもので、当初から全体的な総意を得られるとは思っていなかった。

教授会では、「国際理解」をタイトルにすることについての異論はでなかった。国際理解狂歌コンテストを支持する声が多かったが、当時日本福祉大学が高校生を対象にした福祉エッセイコンテストを朝日新聞とタイアップして実施していたため、国際理解エッセイコンテストの実施をという声もあった。しかし、私が直前まで所属していた独立行政法人国際協力機構（JICA）が中高生を対象とした「国際協力エッセイコンテスト」を実施し、毎年20,000人以上の応募がありとても太刀打ちできないこと、逆にJICAの協賛・後援を得るためにも別の方策を取るべきであることを説明して

*中部大学国際関係学部国際関係学科

解を得た。また国際理解フォトコンテストはどうかとの意見も出たが、主対象とする高校生が課題に適した写真を撮るような機会を持ち難いことを説明し、最終的に国際理解狂歌コンテストの実施が決定された。ただ、狂歌は川柳とは異なり一般的になじみの薄い言葉であることや、「狂」の字がイメージ的にふさわしくないことから、よりわかりやすい「国際理解短歌コンテスト」と称することにし、野田真里助教授から提案のあった「国際理解をタンカで斬る」を副題とすることで狂歌の意味合いを持たせることにした。

以上を三浦昌夫学監に報告し、学部行事ではあるが資金的な協力を受けることになった。

2. 第1回国際理解短歌コンテスト(2004年度)の実施

2-1. 募集

コンテスト実施を担当する事務局メンバーは、国際文化学科から中山紀子助教授、国際関係学科から筆者、また大学当局から田中喜夫広報部次長と田中寿美広報出版室長が選出され、国際関係学部高木秀明事務室長と水田有香職員が実務を担当することになった。募集期間は、9月1日から10月20日までとした。

一方、コンテストの理解と協力を得るために、後援を独立行政法人国際協力機構(JICA)、独立行政法人国際交流基金、財団法人日本国際協力センター、特定非営利活動法人名古屋NGOセンター、愛知県教育委員会および春日井市教育委員会に依頼した。

また、「愛・地球博」連携協力として財団法人日本国際博覧会協会から了解を取り付け、外務省のODA50周年の記念事業としても認定された。

第1回国際理解短歌コンテストのチラシの内容(裏面)は、下記の通りとした。



国際理解短歌コンテスト募集要項

1. 趣旨

2005年、愛知県は中部国際空港の開港、日本国際博覧会の開催と国際化に拍車がかかる中、中部大学国際関係学部では、世界の平和と人々の幸せを願い、第一回「国際理解コンテスト」を実施します。短歌は五七五七七の31文字とします。作品のテーマは、イラク、パレスチナ、北朝鮮問題など激動する国際情勢、ODA(政府開発援助)、NGO(非政府機関)、ボランティアによる国際協力活動、海外旅行で触れ合った外国の人々との交流、アラビア語、スワヒリ語など世界の言葉や異なる世界の文化との出会い、日本国内に在留する外国人留学生、労働者とのふれあいなど国際理解に関するテーマです。

2. 応募方法

住所、氏名(ペンネームは認めません)、郵便番号、年齢、職業(学生の場合は、学校名、学年)、連絡先(住所、メールアドレス、電話番号)(*職業欄に記入がない場合には、大学生・一般部門と

して扱う)、応募部門(①大学生・一般部門、②高校生部門、③中学生部門)を明記の上、郵送(はがき、封書)、メール、FAX、またコンテストのHPのいずれでもできます。

3. 応募先/お問合せ

〒487-8501

愛知県春日井市松本町1200

中部大学国際関係学部「短歌コンテスト」係

電 話：0568-51-1111(代表)「短歌コンテスト」係とお伝えください。

F A X：0568-52-1325

E-mail：tanka@office.chubu.ac.jp

<http://www.chubu.ac.jp>

4. 締め切り

10月20日(消印有効)

5. 入選発表

11月に中部大学のHPで紹介します。(入選者には別途直接連絡します。)

6. 賞

●最優秀賞：各部門1名で計3名 賞状と副賞(図書券30,000円)

●優 秀 賞：各部門3名で計9名 賞状と副賞(図書券10,000円)

●特 別 賞

①国際政治経済賞：各部門3名 賞状と副賞(図書券5,000円)

②国際開発協力賞：各部門3名 賞状と副賞(図書券5,000円)

③国際比較社会賞：各部門3名 賞状と副賞(図書券5,000円)

④国際言語文化賞：各部門3名 賞状と副賞(図書券5,000円)

●佳 作：各部門若干名 賞状と副賞(中部大学グッズ)

●優秀校賞：学校単位で応募した中学校、高校のうちから各部門2校に賞状と副賞(図書券30,000円)

その他

1. 高校生部門と中学生部門は個人で直接応募しても、また学校で取りまとめて応募していただいても結構です。学校単位で応募された場合には優秀校の対象となります。
2. 一人何首でも応募可能です。
3. 応募作品は、自作のオリジナル未発表作品に限ります。(違反した場合には、入賞を取り消します。)
4. 選考委員は独立行政法人国際協力機構(JICA)、ジャーナリスト、中部大学国際関係学部教員、中部大学国際関係学部学生など。
5. 入賞作品の著作権は、中部大学に帰属するものとします。中部大学では、入賞作をパンフレットとして作成し、また中部大学発行のパンフレットなどにも使用させていただきます。

広報用のチラシ表面には、筆者と長島信弘教授の作成した下記短歌を例として掲載し、写真は筆者がアフリカで撮影したものなどを利用した。

- ※家焼かれ 母と逃れた 難民の 小さき命に 幸せあれと
- ※机なく 教科書もなく 先生の 板書見つめる タンザニアの子
- ※ヨン様に 熱を上げてる おば様に 日韓交流 カムサハムニダ
- ※おみやげの 心配ばかりが先に立ち 何を見たのか 世界遺産を

また広報出版室作成のHPや、広報部によるプレスリリース、中高校へのチラシ配布などで広報を開始するとともに、各教員にメールで所属団体などへの通知や講義等で中部大生への応募勧奨を行うように依頼した。

2-2. 審査・表彰

国際理解短歌コンテストは、初めての経験であるため応募数がどれほどか予測がまったくつかず、不安な気持ちで状況を見守るしかなかった。しかし、不安は的中し、応募の出足は予想以上にぶく、締め切り日12日前の10月8日に、筆者は学部教員宛に次のような文面を含む文書を配布し、応募勧奨の促進を依頼した。

皆様にご協力いただいております、中部大学国際関係学部「第一回国際理解短歌コンテスト」の締め切りが、今月20日と迫ってまいりました。8日現在、応募数は400首強と、全国各地から集まっておりますものの、予想していた数字を大幅に下回っております。

しかし、10月8日には400首強だった応募も日を追うごとに増加を見せ、特に最終週にはまとまって短歌が到来し、締切日の10月20日には、24都道府県、外国2カ国から、一般・大学生部門が1,024首、高校生部門が1,657首、中学生部門が785首、総計で3,466首となって、関係者一同胸をなでおろすことができました。

作品選考は、一次審査を事務局教職員のほか下記教員代表と学生代表が行った。

一次審査委員

国際関係学科：田中高教授、三船恵美助教授、原田太津男助教授、羽後静子助教授

国際文化学科：長島信弘教授

国際関係学科(学生)：鈴木裕之君、重森春菜さん

国際文化学科(学生)：双田佳寿君、小田桐由佳さん

最終審査は、一次審査作品を下記3名の委員に委嘱した。

最終審査委員

委員長：中部大学国際関係学部長 宮本正興

委員：朝日新聞論説委員 渡辺斉氏

委員：独立行政法人国際協力機構中部国際センター所長 松田教男氏

最終審査の結果、部門ごとに最優秀賞1首、優秀賞3首、特別賞(4専攻)3首、それに佳作として大学生・一般部門14首、高校生部門23首、中学生部門10首と、計95首が優秀作品として入賞した。また学校賞は高校部門が大分豊府高等学校と長野県飯田風越高等学校、名古屋大学教育学部附属高等学校が、中学校部門では愛知県の春日丘中学校と山形県の新庄市立新庄中学校が選ばれた。入賞作品は広報出版室が作成した作品集に収録され、表彰式当日にホームページでも公開された。

表彰式は、11月7日に中部大学三浦幸平メモリアル・ホールで開催された中部大学国際関係学部主催「国際関係学部シンポジウム」にあわせ、近隣の入賞者を招いて開催された。ちなみに最優秀賞には3万円相当、優秀賞には1万円、特別賞には5000円相当の商品券、図書券、もしくは賞品が、また佳作には中部大学グッズが授与された。

入賞作品に関して、中日新聞、毎日新聞などが記事を掲載した。

第1回 国際理解短歌コンテスト入選作品

最優秀賞

■大学生・一般部門

シェラレオネの 難民キャンプに 思い馳せ 折り鶴を折る 我が生徒達

(長野県 菅沼節子)

■高校生部門

悔しいな 裸足で花輪 売る少女 何もできずに 見ている自分

(名大教育学部附属高校 永田梨紗)

■中学生部門

難民の 写真の奥の 笑顔見て 幸せなのと 誤解する僕 (新庄市立新庄中学校 池田華子)

優秀賞

■大学生・一般部門

一万円 夜の飲み屋か ワクチンか 問うてみるなり 命の価値^{ねだん} (中部大学 岩間優希)
バオバブの 木の下集いし 子どもらが ゴムマリ蹴りて W杯夢見る^{セカイ} (北海道 佐野比呂己)
日本語を まじめに学ぶ あなた見て 私も学ぼう あなたのことは (中部大学 尾上文美)

■高校生部門

僕たちが 生きている この地球には “世界の中心” なんてないんだ

(大分豊府高校 佐伯勇哉)

凜とした アテネを駆ける その足は ユニフォームもなく 自国を背負う

(名大教育学部附属高校 久田七菜子)

お赤飯 おばあちゃんが たきました 今日は我が家に 留学生来る

(飯田風越高校 中村瑞季)

■中学生部門

バクダット 大量兵器 見つからず 何がただしく なにが悪なの

(碧南市立南中学校 鳴瀬晃広)

地雷うめ あなたが死んだ その後も あなたは残らず 地雷は残る (春日丘中学校 菅原惇)

ほんやりと 虚空を見つめる その目には 戦火の炎と 荒野が映る

(新庄市立新庄中学校 上村亜沙美)

特別賞 ―国際政治経済部門―

■大学生・一般部門

「母国なの」 視線を落し 握手の 拉致の記事の文字 大きく歪む (三重県 熊井由布子)
鋭い目 小さな体に 似合わない おもちゃの代わりに 持つのは 銃器

(北海道教育大学札幌校 加藤真菜美)

五輪では 共にかかげる 統一旗 いつ叶うのか 南北統一

(愛知県 土橋巧)

■高校生部門

光ある 子供の未来 とどされて なにがのこるか イラクの戦争 (春日丘高校 尾身竜乃介)
国境と 言う名の鎖 ほどき今 地球の市民 団結の時 (大分豊府高校 神田奈美)
争いの 復讐なんて やるのなら 予習しようよ 今後の未来 (北見北斗高校 松村彩美)

■中学生部門

絶望と 飢えと苦しみ あるときも にこりと笑う 難民の子ら

(新庄市立新庄中学校 三上広大)

イラクから ながれる世界の 血と涙 私の心に 疑問と涙 (半田市立亀崎中学校 杉浦梨央)
テロの国 そう言われても 住む人に とっては同じ ふるさとの国

(新庄市立新庄中学校 渡辺尚貴)

特別賞 ―国際開発協力部門―

■大学生・一般部門

欲びで はしゃぐ我が子と 逃げ惑う 姿重なる ガレキの上で (愛知県 鈴木学)
地下水だ! あふれる水の きらめきに 村人たちの 笑顔ほころぶ (中部大学 奥村さやか)
タイの裏 覗いてみたら 悲しみで 消えかけている 微笑の国 (富山大学 高木純)

■高校生部門

援助より 貿易望む 途上国 今こそやろう フェアトレードを

(東京都立目黒高校 亀山敏和)

人間は 環境破壊 し続ける まるで地球の ガン細胞だ (日生学園第一高校 小塚雄太)
学校の 授業も 何も受けれない 人もいるのに サボる僕達

(名大教育学部附属高校 中村崇人)

■中学生部門

高い値を ふっかけられる 日本人 貧しい僕も 金持ちになる

(新庄市立新庄中学校 鈴木雄介)

笑顔とは 消えることない 悲しみを 希望にかえる 小さな行動

(新庄市立新庄中学校 藤田佑希)

1ドルで 生活をする 人達と 100円なんてと 馬鹿にする日本 (春日丘中学校 長谷川誠)

特別賞 ―国際比較社会部門―

■大学生・一般部門

「おやすみ」に 「おはよう」と来る Eメール 地球の裏も 隣のようなね (愛知県 戸田勝昭)

日本人　なのに照れてる　ゆかた着て　静かに思う　われはブラジル　(兵庫県　大西真理子)
民族も　国も文化も　違うけど　見上げる月は　同じ輝き　(中部大学　板谷篤史)

■高校生部門

異文化と　触れ合い　初めて知る母国　自分の世界の　狭さを悔やむ
(大分豊府高校　久下夕佳里)
不思議だが　外国に行き　見たいのは　金髪じゃなく　外の考え　(釧路湖陵高校　柿沼正志)
異文化の　色を混ぜつつ　作ろうよ　世界平和の　グラデーション　(大分豊府高校　麻生卓志)

■中学生部門

異文化を　体で感じ　覚えてく　先入観の　まちがい気づく
(名古屋市立若葉中学校　浅野良祐)
靴下の　穴すら気にする　日本人　服の穴など　気にせぬ人々
(新庄市立新庄中学校　伊藤圭一)
世界遺産　一度は見たい　ピラミッド　古代の王は　今まだ輝く
(江南市立布袋中学校　石原未菜)

特別賞　—国際言語文化部門—

■大学生・一般部門

ニューヨーク　いろんな言語　混じり合い　見せつけられた　世界の広さ
(中部大学　石川なつ美)
六年間　習ってできない　英会話　半年恋して　覚えたハングル　(愛知県　鈴木恵)
箸使い　弁当食べてる　留学生　食欲の秋に　国境はなく　(愛知県　溝手敏夫)

■高校生部門

文字という　道具使える　ありがたさ　共有したいな　世界の人と
(名大教育学部附属高校　石川未奈子)
カタコトの　英語で二人　communication　君も私も　Asian Girl
(九州国際大学附属高校　折田菜々子)
動詞達　おかしいほどに　変わってく　でも魅力的　イスパニオール
(飯田風越高校　高橋麻美)

■中学生部門

日本語の　意味の深さに　とまどって　言いつくせない　私の気持ち
(半田市立青山中学ならわ学園分校　澤田レジ)
イチローが　一本打ったと　話しかけ　外国人と　国際交流
(江南市立布袋中学校　下家美智子)
ふと思う　話す言葉の　違うこと　いったいつから　始まったのか
(新庄市立新庄中学校　石田健一)

佳作

■大学生・一般部門

なぜ行くと　不思議な顔で　聞かれるも　ボランティアに　ただ行きたくて　(福井県　澤山博輝)

戯れに 話してくれる アフリカの 遠い言葉の 不思議な音 (ね) (大阪府 河井洋子)
 すやすやと 電車で眠る 日本人 不思議に思う 自分も眠る (中部大学 朱英娜)
 ヒマラヤに 万年雪の ひとしづく 世界を巡る 青い地球 (大阪府 河野政己)
 あるあると 叫べど掘れば 土ばかり いつわる心 世界救えず (中部大学 勝又雄)
 中東で お互い言葉 通じない しかし熱意で 以心伝心 (中部大学 松井青葉)
 スーダンの 幼き子の眼は まろけれど 消えゆる時なき おびえと怖れ (愛知県 犬飼亮介)
 国と国 結ぶ絆は 人と人 政府ではなく 心の絆 (愛知県 山崎出)
 テロニュース 日々にしあれど 聞き流し 白き飯喰 (は) む寒き心よ (東京都 角田勝彦)
 ファインダーへ まっすぐな視線 澄みており 命輝け 片足の子ら (静岡県 山崎京子)
 十キロの 荷物を背負い タイランド 異文化にふれ 娘は変わりたる (愛知県 水野育子)
 日本語を 教えたつもりが 三河弁 生徒気づかず 真似る留学生 (愛知県 松井敏博)
 日系人 収容所にて 耐えた日々 過去を背負いし 今やすらかに (アメリカ合衆国 高木美早)
 本当の 正義優しさ どこにある たてまえだけの 今の世の中 (愛知県 三浦涼子)

■高校生部門

喜びに こぶしを挙げて 叫ぶ声 アテネにひびく 「超きもちいい」
 (愛知県春日丘高校 白澤建至)
 海をこえ 友達になって くれるかな 願いをこめて とばす風船
 (長野県蘇南高校 古谷志穂美)
 外国語 文法だけを 教わって 外国人を 見ると逃げ腰 (長野県蘇南高校 斧洞望)
 パレスチナ 銃声響く 町並みに 今も消え逝く 命の灯 (あかり)
 (長野県蘇南高校 川阪竜也)
 世界には いろんな障害 あるけれど みんな一生懸命 パラリンピック
 (愛知県春日丘高校 道木里奈)
 コンビニで ぼきんしながら かんがえる セカイヘイワと ヒトのしあわせ
 (愛知県春日丘高校 櫻井浩之)
 新聞を 眺めてみると 目に留まる 他国の事件 横は芸能 (愛知県春日丘高校 服部雄太)
 外国人 日本の文化 漫画読み 同じ楽しみ 持てる嬉しさ
 (三重県日生学園第一高校 鈴木愛美)
 シスラーの 記録破った イチローの サムライ魂 世界で光る
 (三重県日生学園第一高校 岩崎佑真)
 アテネ五輪 イラク代表 輝いた 戦後の暗闇 一筋の光 (長野県飯田風越高校 尾曾剛史)
 知るだけで 終わらせたくない この気持ち 行動にうつす ボランティア
 (長野県飯田風越高校 仲山聖子)
 ヨン様が 近くて遠い 韓国を ビデオ屋にまで 連れてきたんだ
 (北海道釧路湖陵高校 柿林政孝)
 テロリスト 一杯どうかな 熱いお茶 これでも飲んで 落ち着きなさい
 (北海道釧路湖陵高校 的野皓一)

名も知らぬ 世界で苦しむ 友達に 物資を届ける 我が母校あり

(長野県大町北高校 萩無里亜希)

混血の 自分を生んだ 両親の 国境越えた ちいさな理解 (長野県大町北高校 高山立輝)

マスメディア イラク報道 満載で 忘れられる アフガニスタン

(愛知県中部大学第一高校 小原久人)

EXPO (エキスポ) で 名をとどろかす 瀬戸の町 世界を目指す 若い俺たち

(愛知県中部大学第一高校 奥村元厚)

俊足で 敵を惑わす サムライが 米の歴史を 今塗りかえる (愛知県衣台高校 久保田拓)

私利私欲 尽きることなき 戦争で 哀しむのは いつも幼児 (おさなご)

(愛知県衣台高校 諸岡由美子)

春生まれ 夏秋過ぎて 冬は来ず 短き命と 長命日本

(愛知県衣台高校 山口健太)

戦争で 罪無き子供 星となり 天に登って 何を思うか

(愛知県刈谷高校 原田大輔)

世界中 言葉はいつも 交わされて 武器になったり 花束になる

(愛知県幸田高校 竹岡佐緒理)

デパートの 食品売場に 並ぶ品 色鮮やかかなり ワールドバザール

(長野県松商学園高校 穂苅晃)

■中学生部門

ゆかた着て 輪になり踊った 盆おどり 笑顔輝く スリランカの友

(愛知県名古屋市立神の倉中学校 寺島望月)

交流で 日本のことを おしえつつ 日本を知らない ぼくたちがいる

(愛知県名古屋市立神の倉中学校 伊藤朋泰)

かたことの 日本語だけど 通じたよ 話たかった スリランカの子と

(愛知県名古屋市立神の倉中学校 金原里奈)

戦争後 どんな援助を してみても 人の命に かなうものなし

(愛知県春日丘中学校 長江洋和)

紛争地 そこで生きてる 人は知る 幸せなのは 今生きること

(三重県日生学園日生中学校 根岸あゆみ)

はなやかな 世界はただの 表向き 裏の世界は 戦と犠牲

(三重県日生学園日生中学校 大谷麻実)

平和とは 世界の人が 助け合う そんな世界に 僕はかえたい

(愛知県豊橋市立東部中学校 大木翔太郎)

明日には 消えているよね? 今日の地雷 邪魔はしないで… 「僕の未来」

(大阪府東大阪市立小阪中学校 窪田遼太郎)

人々が 突然消えてく 七不思議 出会えたときには もう年老いし

(愛知県豊田市立石野中学校 藤村成美)

体重は 人それぞれで ちがうけど 命の重さが ちがう人なし

(愛知県春日井市立南城中学校 田辺広大)

優秀校賞

■高等学校

大分県立大分豊府高等学校 長野県飯田風越高等学校 名古屋大学教育学部附属高等学校

■中学校

春日丘中学校 新庄市立新庄中学校

3. 第2回国際理解コンテスト(2005年度)の実施

3-1. 募集

第1回国際理解短歌コンテストの終了後、コンテストを継続して実施するか否かの議論はなされないまま年をあげた。2005年5月になり再び宮本学部長から、第2回を検討するようにとの指示があり、教授会の承認を得て6月に実行委員会を立ち上げた。

委員は、国際関係学科から高英求教授、国際文化学科から堀内勝教授、人文社会教室から高木徹助教授、外国語教室から今村洋美助教授が、また昨年同様に田中喜夫広報部次長と田中寿美広報室長が選任され、コンテストの実施を担当することになった。前回は不明瞭だった筆者の立場は、実行委員長に指名されることにより明確化され、大会委員長は宮本正興国際関係学部長が担当した。

第1回コンテストの審査は、応募締切日から表彰式までの期間が17日間しかなく、審査および作品集の作成に余裕がなかった。そのため、第2回は募集期間を前倒しにし、7月1日から9月30日までとした。これには、中高生に夏休みの宿題として短歌を作成してもらおうとの思惑もあった。表彰式は、11月上旬の学部主催国際学部主催シンポジウムにあわせることにした。

第2回の実施要領は、高木事務長の提案により個人情報の取り扱いについての文言を付け加えたほかは、概ね第一回目に準拠することとしたが、入賞作品数は予算の関係もあり優秀賞を割愛することにした。広報募集用のチラシに加え、新たにポスターを作製し、関係高校、中学校及び後援団体などに配布した。なお、チラシ、ポスターには第1回目優秀作から4首を掲載し、国際関係学科鈴木裕之君がインドネシアで撮影した写真も利用した。

支援団体は、第1回後援団体に加え、独立行政法人日本貿易振興機構名古屋貿易情報センターに依頼し、三浦学監、田中広報室長の口添えで、協賛団体として株式会社JTB教育旅行名古屋支店と株式会社ベネッセコーポレーションが決まった。

3-2 審査・表彰

第2回は、一般・大学生部門が495首、高校生部門が1,949首、中学生部門が1,495首の合計3,939首の応募となった。一般・大学生部門は529首減、高校生部門は292首増、中学生部門はほぼ倍増の710首増で、合計473首の増となった。大学生・一般部門の減少は、第1回目は学内(特に中部大生)からの応募が多かったのが、減少したものである。



審査は、教職員実行委員に加え、下記学生審査委員が担当した。

大学院国際人間学研究科言語文化専攻 西野善博君、溝上美由紀さん

国際関係学科 中村友香裡さん、山田大介君、小椋顕君

国際文化学科 田中祐子さん

最終審査は、審査委員長を宮本学部長が務め、委員として第1回同様に独立行政法人国際協力機構中部国際センター松田教男所長、そして筆者が担当した。

最終審査の結果、応募数等を勘案し、最優秀賞は各部門1首、特別賞は、大学生・一般部門は各専攻賞2首、高校生部門、中学生部門はそれぞれ各3首とした。その結果佳作の大学生・一般部門9首、高校生部門13首、中学生部門14首をあわせ、合計71首が入選作となった。

優秀校賞は、高校部門が長野県下伊那農業高等学校と三重県立松阪高等学校、中学校部門は近畿大学附属東広島中学校と山形県の新庄市立新庄中学校が入賞した。

また、今回は優秀校特別賞を設け、高等学校部門で岐阜県立武義高等学校と中部大学第一高等学校が、また中学校部門では豊川市立東部中学校が受賞した。

表彰式は、11月7日に三浦幸平メモリアル・ホールで開催された国際関係学部シンポジウムの席上、第1回同様に近隣の入賞者を招いて開催した。

第2回 国際理解短歌コンテスト入選作品

最優秀賞

■大学生・一般部門

青春は 今この時と アフリカで 教壇に立つ きみ輝かし (大阪府 安藤知明)

■高校生部門

朝起きて 受信メールは From UK 辞書を片手に ENGLISH モード
(飯田風越高等学校 知久希美佳)

■中学生部門

銃をもつ あのこも同じ 13歳 僕の手には コントローラー
(岩倉市立南部中学校 高本亮多)

特別賞 —国際政治経済賞—

■大学生・一般部門

享受してる 平和や豊かさに 気づくのは いつもそれが 脅かされた時
(北海道 加藤真菜美)

チャドル巻く イラクの女(ひと)の 初投票 微笑み堅く カメラに向かう
(三重県 熊井由布子)

■高校生部門

難民を 拒み続けて 日本国 鎖国は江戸で 終わっていない
(三重県立松阪高等学校 西井啓介)

本当のことは知らされないのかも テレビのニュースが 全てではない

(春日丘高等学校 磯野恵里)

ニュース見て またテロかよと 慣れてきた そんな軽い ものじゃないのに

(下伊那農業高等学校 三沢春香)

■中学生部門

長ズボン 脱ごうとしない おばあちゃん 苦しみ続ける 戦争の傷

(近畿大学附属東広島中学校 大澤風舞)

殺人は 罰せられるが 戦争を 起こした人は「無罪」でいいのか

(近畿大学附属東広島中学校 佐々木佳司)

夢は何? 大人になるまで 生きること 私達には 信じられない

(豊川市立東部中学校 田中智子)

特別賞 ―国際開発協力賞―

■大学生・一般部門

日本では たかが学校 あざ笑い 途上国では 教育求める

(愛知県 黒岩雅史)

水道も 電気もない村 訪れて 時間(とき)の流れに 安らぎ覚ゆ

(山形県 伊藤茂一)

■高校生部門

人間の 価値は無限と いうけれど 値段をつけられ 売られる少女ら

(名古屋大学教育学部附属高等学校 小山剛)

僕の蹴る ボールを作る 少女の手 それを知らない 昨日までの僕

(香川県立観音寺第一高等学校 井下翔平)

日本から 世界に飛び出た MOTTAINAI 世界を変える きっかけになれ!

(下伊那農業高等学校 小山和希)

■中学生部門

「助けて」と 聞こえてきたは 空耳か 世界のどこか 手を伸ばしてる

(岡崎市立福岡中学校 梅村優実)

屋根の無い 学校で授業 受けている 私の学校 豪邸なのか

(名古屋市立笹島中学校 岡本剛)

僕達は いったい何を 見てるのか 貧しき子らの 笑顔の向こう

(新庄市立新庄中学校 小野ちひろ)

特別賞 ―国際比較社会賞―

■大学生・一般部門

貧富の差 カトリナにより 浮き彫りに 先進国の ゆがんだ現状

(愛知県 内藤晴樹)

用足して はじめてわかる 生活感 ところ変われば トイレも変わり

(長野県 飯沼尚隆)

■高校生部門

イギリスの 生徒が作った 折り紙の 羽にかかれた PEACE の文字

(飯田風越高等学校 大平早紀)

この世界で 生きてゆくなら 知っていよう 悲鳴をあげてる 自然の怒りを
(三重県立松阪高等学校 肥満美香)
教科書に 載らない過去とは 何ですか あたしは知りたい 日本のしたこと
(三重県立松阪高等学校 小島沙織)

■中学生部門

認めよう 互いの文化と その心 多様な世界が 地球の財産
(近畿大学附属東広島中学校 神田拓樹)
戦争後 こわれた町は 直せるが 心の傷は 癒えることなし
(近畿大学附属東広島中学校 森政悠)
野口さん 宇宙で仕事 大変だ でも未来へつなぐ 夢のかけ橋
(碧南市立中央中学校 岩間一樹)

特別賞 —国際言語文化賞—

■大学生・一般部門

スワヒリの 唄覚えたと 「マライカ」を 披露する友 還暦を過ぐ (大阪府 安藤知明)
妹の 恋の相手は 留学生 初めて目にした 勉強姿 (愛知県 國吉楓)

■高校生部門

“外人”と “外国人”の 差はひとつ のけ者扱い するかしないか
(三重県立松阪高等学校 樋口実華)
ホームステイ 恐れず慌てず 体当たり 心で壊す 言葉の壁 (バリア)
(西南女学院高等学校 清水晴江)
バイト先 外国人も 食べに来る ちょっと通じて うれしい英語
(下伊那農業高等学校 大沢初留菜)

■中学生部門

通じるよ 言葉を越えて 世界越え その笑顔が 僕らの言葉
(常滑市立南陵中学校 石井美希)
道聞かれ 答えられない もどかしさ 決して越えれぬ 壁ではないのに
(名古屋市立守山東中学校 水野友博)
ありがとう たった2日の ホームステイ その思い出は 今も鮮やか
(近畿大学附属東広島中学校 馬屋原史織)

佳作

■大学生・一般部門

ベクトルを 子供の笑顔に 向けてみよう 予先示す 平和の方へ (愛知県 黒岩雅史)
あやまちを くりかえさない 誓いをば 世界に語る 戦後60 (愛知県 石川薫)
万博の スタンプラリーを 集めたら 気分はすっかり 世界一周 (愛知県 大野和美)
一羽ずつ 世界の平和 託されて 千羽の鶴は 国境越える (愛知県 大野和美)
大切な あの人の顔 見れぬまま 今年も終わる 平壤 (ピョンヤン) の夏
(愛知県 二村沙織)

ひらがなを 初めて習う 君たちが ぎこちなく書く “あい” の二文字

(モロッコ 浅井健一)

スマトラで 必死で助ける 医師たちを 固唾を吞んで 見ていた師走 (愛知県 松本和宏)

留学生に 名古屋弁教え デラウミャ〜 翌日会うなり デラウミャ〜ガヤ!!

(愛知県 金子真実)

縁側で お茶を片手に 笑い合う 肌色の違う ふたつの背中

(愛知県 國吉楓)

■高校生部門

いつもなら「髪染めたい」と 思うのに 旅行先では 黒髪アピール

(岐阜県立武義高等学校 長谷川亜実)

気づくのは 世界の広さ 狭き視野 初めて行った 海外旅行

(岐阜県立武義高等学校 猿渡敦子)

モッタイナイ 祖母の口癖 熱帯夜 クーラーつけずに 鳴る風鈴の音

(三重県立松阪高騰学校 中島由衣)

言葉さえ 国さえしらない 人達と 身振り手振りの 国際交流

(中部大学第一高等学校 小倉万奈)

一駅分 たまには自転車 乗ってみよう 浮いた運賃 ワクチン何本?

(近畿大学附属高等学校 玉井絢子)

カタコトの 英語で出来た 会話の輪 文法よりも 気持ちが大事

(西南女学院高等学校 原田まりあ)

米独の 父母持つ友が どこよりも 日本が好きと 笑ううれしさ

(日生学園第一高等学校 井田東吾)

海外へ 行けば私も 外国人 熱意と笑顔で こころ伝わる

(春日丘高等学校 刑部祐衣)

エイズでも かくさず生きる 人たちは とても大きな 勇気の持ちぬし

(下伊那農業高等学校 中島春香)

中国の 反日感情 他人ごと 過去のあやまち 知らない若者

(下伊那農業高等学校 川手直美)

避妊具で 防げる病気は 1つじゃないと 気付いてほしい 若人たちに

(下伊那農業高等学校 佐藤楓)

日本人 輸入してまで 食べ残す “もったいない” は どこへいったのか

(下伊那農業高等学校 喜多野友美)

ゴミだめが いのちのかたと いう国と ゴミがじゃまだと いう国と

(三重県立松阪高等学校 野呂有我)

■中学生部門

一滴の ほほをつたう 涙さえ 口へと運ぶ 子供たち

(豊田市立豊南中学校 海道友希)

生きること 知っているのは 貧しくて 一生懸命 生きてる子達

(大口町立大口北部中学校 稲垣美紀)

自爆テロ 子供の頃の 夢はなに 宇宙飛行士 サッカー選手

(刈谷市立富士松中学校 小原史也)

万博で いつか行くぞと 決めた国 もっと英語を しっかり学ぼう

(豊田市立崇化館中学校 宇野貴仁)

会えずとも 役に立ちたい この気持ち 募金となって あなたに届け

(近畿大学附属東広島中学校 清水綾香)

戦争で 傷痕だらけの 祖父の足 見かける度に 目をそらす自分

(近畿大学附属東広島中学校 中本夏葵)

1本の 洋画を友と 見に行つて 行った気になる イギリスの町

(近畿大学附属東広島中学校 錦木寛加)

空爆や 地雷やテロが あるけれど 離れるわけには いかない大地

(名古屋市立神の倉中学校 増田和浩)

難民の ことも知らずに 僕達は 空腹満たし 残飯あふれ (新庄市立新庄中学校 菅原主水)

テレビ画面 笑顔の奥の 瞳には 苦しみ悲しみ 耐えぬく強さ

(新庄市立新庄中学校 佐藤恵里香)

よそ見する 窓もなければ 机もない 見つめる先は 未来の自分

(新庄市立新庄中学校 大泉かおり)

なぜだろう 同じ種類の 民族が 武器を手に持ち 殺しあうのは

(江南市立布袋中学校 鈴木雄士)

万博の アラビア館で 見た写真 砂漠じゃないんだ ビルの街

(愛知産業大学三河中学校 藤井崇弘)

あなたには 単なる 10円 だとしても 「いのち」が救える 貴重な 10円

(愛知郡東郷町立諸輪中学校 岡祐助)

優秀校賞

■高等学校

長野県下伊那農業高等学校 三重県立松阪高等学校

■中学校

近畿大学附属東広島中学校 新庄市立新庄中学校

優秀校特別賞

■高等学校

岐阜県立武義高等学校 中部大学第一高等学校

■中学校

豊川市立東部中学校

4. 第3回国際理解短歌コンテスト(2006年度)の実施

4-1. 募集

第1回に比較し、第2回の応募が微増ながらも増えたことにより、学部内では第3回短歌コンテストの継続実施が検討され、4月の教授会で実施が決定した。



第3回は、大会委員長を三浦昌夫学監、主催者代表として宮本正興学部長が務めることになり、実行委員会は私を委員長に、国際関係学科から吉瀬征輔教授、羽後静子助教授、国際文化学科から河合秀和教授、杓谷茂樹助教授、人文社会教室から高木徹助教授、外国語教室から小栗成子助教授、それに広報部田中喜夫次長と広報出版室田中寿美室長で構成した。事務局は松村悟事務室長と水田有香職員が担当した。

実施要領は、基本的に従来のやり方を踏襲し、実施の予定を下記の通りとし、各教員に応募勧奨促進を依頼した。

予 定

4月中旬：各学科実行委員の選出

5月中旬：実行委員会開催(原案の提出・承認)

5月31日：チラシの作成

6月10日：広報開始(チラシの配布、HPへの掲載)

7月3日(月)：応募受付開始

(この間、文明への視角、オープンキャンパス、中部大学フェア、連携講座、模擬授業などを活用して広報)

9月30日(土)応募締め切り

10月4日～13日：一次選考

10月16日～20日：最終選考。入賞作品決定

10月23日～27日：賞状、発表作品掲載チラシ等作成、近隣県在住入賞者へ通知

11月上旬：入賞作品発表・表彰式

各教員にお願いしたい事項

- (1) 高校生にターゲットを当てた広報
- (2) 講義・ゼミ等における短歌投稿勧奨(中部大生の参加意識向上)
- (3) 各教員のネットワークを活用した広報(メール配信用に案内文は後日作成します)

募集期間は7月3日から9月30日とし、チラシ、ポスターに掲載する写真は「世界のこども」をテーマにして国際関係学部の学生から公募した。その結果、秋田洋平君、浅岡真理子さん、大野和美さん、岡田浩司君、田邊慶一君の5名の写真がチラシ・ポスターを飾ることになった。

支援団体には、昨年度の後援団体に加え、青年海外協力隊の支援団体である社団法人青年海外協力協会から了解を得、協賛団体は株式会社JTB教育旅行名古屋支店一社となった。

4-2. 審査・表彰

コンテストは第3回ともなると、実施側もだいぶ慣れてくるが、応募に関して予測がつかないのは従来どおりである。今回も不安をいだきつつ推移を見守っていたが、締切日が迫るにつれて中高生からの応募が伸び、その結果一般・大学生部門が30首減の465首、高校生部門が889首増の2,838首、

中学生部門が692首増の2,187首となった。合計では1,551首増の5,490首になり、初めて5,000首の大会を超えることができた。

一次審査は、教職員実行委員と下記学生委員が行った。

国際関係学科 岡田浩司君、國枝晃盛君、前田悠記子さん

国際文化学科 松岡由依さん、田中貫嗣君、長谷川葵さん

一次審査を経た作品は、最終審査にかけられ、審査委員長宮本正興学部長、有識者として独立行政法人国際協力機構中部国際センター米田博所長、それに筆者の3名が行った。

その結果、大学生・一般部門は最優秀賞1首、特別賞が6首、高校生部門は最優秀賞1首、特別賞15首、中学生部門は最優秀賞11首、特別賞12首、佳作は各部門合計36首で、総計72首が入賞作品として選定された。

優秀校には、高校部門が三重県立松坂高校と長野県豊科高校、中学校部門は常滑市立青海中学校と愛知産業大学三河中学校が入賞した。

表彰式は、11月11日に名古屋キャンパスで開催された国際関係学部シンポジウムにあわせて開催され、三浦大会委員長の挨拶の後、主催者代表の宮本学部長から賞状と賞品が入賞者に授与された。

第3回 国際理解短歌コンテスト入選作品

最優秀賞

■大学生・一般部門

キャンプの子 古新聞の 皺延ばし ワールドカップの 写真に見入る (大阪府 安藤知明)

■高校生部門

今何時 時計を見つめ 海外で 仕事をしてる 父を応援 (日生学園第一高等学校 小泉梨沙)

■中学生部門

ホームステイ 写真を見るたび 考える ちゃんと家族に なれていたかな
(碧南市立南中学校 小栗末樹子)

特別賞 国際政治経済賞

■大学生・一般部門

アフリカの 難民キャンプに 今いると 届いたきみの 便りの重さ (大阪府 安藤知明)
善悪の 区別まだない ^{おきなこ} 幼子に ^{われ} 平和教える 教師の責任 (福岡県 植山敦子)

■高校生部門

これからの 未来を作る 俺達が 世界をしらず 何ができる
(中部大学第一高等学校 村瀬仁誌)
文明が 進歩する程 人間は 地球と己の 命縮めて (三重県立松阪高等学校 加山哲也)
国々で 違う正義を 教えられ 意見対立 国境の壁 (三重県立松阪高等学校 井上愉友佳)
日本国 綺麗な歴史 書き並べ 消された文字と 消えない歴史 (豊科高等学校 松島真仁)

■中学生部門

「キレイ」だと 見上げた空と 同じ空 戦地の子には どう映るのか
 (新庄市立新庄中学校 小野ちひろ)

会議より ボール1つで つうじあう スポーツの魔法 今キックオフ!
 (東海市立加木屋中学校 平松可奈子)

お国自慢 皆胸張る 万博で 語らう人に 国境はなし (名古屋市立沢上中学校 岩田夕貴)

特別賞 ―国際開発協力賞―

■大学生・一般部門

教室の 片隅に光る 小さな目 明日を見据える バングラの子ら (岡山県 吉川久美子)

カンボジア バナナを植えた ボランティア 離れて思うは 収穫の笑顔 (長野県 松下太郎)

■高校生部門

コンビニで 「ジュースは我慢!」と 募金して 難民の子の 写真をなでる
 (岡山県立岡山操山高等学校 杉山高志)

関係ない その一言が 奪ってる 戦地の子供の 自由と平和
 (愛知県立知多翔洋高等学校 中野優実)

あなたの手 貸して下さい 僕たちに みんなの支援 僕らの未来
 (高知市立高知商業高等学校 鴻上麻衣)

■中学生部門

文房具 抱きしめている その笑顔 募金の声に 体が動く (常滑市立青海中学校 斎田夏希)

アフリカの あの子に これを届けたい 鉛筆一つに 思いをのせて
 (名古屋市立沢上中学校 森岡柚香子)

水くみを 毎日している 子供たち 水道あったら 何をしたい?
 (岡山市立操山中学校 宮原唯)

特別賞 ―国際比較社会賞―

■大学生・一般部門

1ルピー ケチッてすごす 僕がいて 1,000円無駄に 使う僕もいる (愛知県 稲葉亮二)

■高校生部門

この地球 どこで分かれた 二本道 肥えゆく国と 痩せゆく国と
 (三重県立松阪高等学校 吉田周平)

武器持たず ボール一つで 争った 平和な戦争 ワールドカップ
 (春日丘高等学校 垣内康佑)

国際理解 他国を知ろうと するけれど 一番知らない 日本のこと
 (飯田風越高等学校 飯島由布子)

知りたいと 思う気持ちで 変わってく 海の向うの 友情関係
 (愛知県立知多翔洋高等学校 早川亜希)

■中学生部門

食べ物が 洋食化する 日本人 しかしアメリカ 和食がブーム
 (常滑市立青海中学校 竹内健)

海外旅行 テレビつけたら ドラエモン 知らない言葉で 大活躍

(刈谷市立刈谷東中学校 加藤昌親)

エジプトの 古代遺跡に 刻まれた 人の名前は なぜかひらがな

(愛知産業大学三河中学校 藤井崇弘)

特別賞 —国際言語文化賞—

■大学生・一般部門

アジアから 身近な仲間 我が家にも ホームステイに 心はずまん (愛知県 鈴木徳二)

■高校生部門

この短歌 作っている今 この時が 国際理解の 入り口に立つ

(九州国際大学附属高等学校女子部 村田遥)

いつの日か 海の向こうへ 渡るため コツコツ貯める 言葉の貯金

(加藤学園暁秀高等学校 小野裕紀)

赤道を 渡った先は 夏の国 思い出鮮やか 語学研修

(飯田風越高等学校 村松佳奈恵)

臆せずに 心で叫ぶ その意志に 言葉の壁など 無いに等しい

(豊科高等学校 中嶋卓也)

■中学生部門

店へ行き 外人見ては 顔が合う 思わずドッキリ 相手にっこり

(常滑市立青海中学校 棚川真生)

道聞かれ カタコト英語で 返事する 通じたことが ちょっとうれしい

(碧南市立中央中学校 和田明莉)

ニイハオと アンニン豆腐 口にして 中国人に なりきる私

(刈谷市立刈谷東中学校 原田果奈)

佳作

■大学生・一般部門

この思い 辞書を片手に つづっても 字が読めなくて 受け取れぬ君 (愛知県 大野和美)

人々の 喜ぶ姿が 見たいから JICAに入り 世界へ飛び立つ

(愛知県 幡野泰一)

アニメとは 人々結ぶ 掛け橋だ 世界で映る 日本のアニメ

(愛知県 小谷憲司)

ごみ拾い 日本でやったら ボランティア 途上国では 生活の糧

(岐阜県 河地芳弘)

留学生 あなたと勉強 してみたい めざすは日中 バイリンガル

(愛知県 秋田直)

ハウジンハ イマセンデシタ というニュース ほっとするのは 悲し過ぎるよ

(沖縄県 石原晋)

ニッサンや トヨタの後を 駆けてゆく モロッコ産の ロバヤラバたち

(モロッコ 浅井健一)

■高校生部門

この百円 財布にしまわず 募金しよう 私にもできる 国際協力

(茨城県立日立第一高等学校 山下加奈)

無を悟り 新聞越しに 訴える 白黒写真の 大きな瞳

(東京都立武蔵高等学校 松田典子)

一日に 三万人もの 夢消える 予防接種で 救えた命

(長野県豊科高等学校 大原範子)

テレビ見て 知った気である テロ事件 現地じゃなくちゃ わかるはずない

(豊科高等学校 下里彩華)

荒野 (あれの) にて 飢えに泣く子の チャンネルの ひとつ隣は グルメ番組

(下伊那農業高等学校 北原綾)

空見上げ 星を楽しむ 人いれば 赤い夜空に 逃げる人々

(中部大学第一高等学校 河村佳佑)

空腹を どれだけの人が 感じてる? 私たちは 授業中だけ (春日丘高等学校 村松由季子)

あの場所に 必要なのは 火ではなく 油でもなく 水だったのに

(愛知県立明和高等学校 宮川亜弓)

エアコンで あける大穴 オゾンの目 ふり注ぐのは 死の熱視線

(三重県立松阪高等学校 野呂有我)

幸せと 感じる私の その一秒 どこかの国で 苦しむ誰か

(三重県立松阪高等学校 糸川ゆりえ)

ガソリンに 混ぜて使われ サトウキビ 注目される 代替燃料

(奈良県立桜井高等学校 西村治)

君が立つ その足元に 潜むのは 悪の地雷か 溢れる石油か

(天王寺学館高等学校 吉見和記)

地雷の地 安全な地の 君と僕 蹴るのは同じ サッカーボール

(九州国際大学付属高等学校女子部 右近里奈)

国を越え 人種を越えて おもいやる それが平和な 未来をつくる

(福岡県立八幡高等学校 山辺光莉)

このままで いいわけないと 言いつつも 何もできない 私がここに

(福岡県立八幡高等学校 麻生佳奈)

■中学生部門

授業中 けしごむなげて 遊んでる 世界のどこかで けしごむ探し

(戸板学園戸板中学校 鈴木夏生)

肌の色 文化も言葉も 違うけど 地球という名の 一つの家族

(愛知産業大学三河中学校 深澤希望)

何気なく 蛇口をひねり 水を飲む 幸せ教える 水汲む子たち

(東浦町立西部中学校 及川久史)

外国に あこがれている 現代人 日本にもある 素敵な文化

(知多市立中部中学校 鰐部勢也)

同じ空 見つめる君は 何処に居る 何をしていて 今何思う

(常滑市立青海中学校 伊藤里奈)

朝ご飯 食べたい人が 食べられない 食べれる僕が 食べたくない

(東海市立上野中学校 中島駿)

朝起きて 学校行くこと あたりまえ そんな毎日 それが幸せ

(東海市立上野中学校 木村圭伸)

戦場に 響く爆撃 そのかわり 見せてあげたい きれいな花火

(刈谷市立富士松中学校 坂田洋一郎)

ついに来た WBC 優勝だ いつかはオレも イチローみたいに

(犬山市立南部中学校 柳川卓摩)

日本では 教えてくれない 韓国の つらさやくるしみ 分かってあげたい

(犬山市立南部中学校 中村勇輝)

ゲームしか 戦い知らない 私達 どこかの国では 悲しい現実

(知立市立知立中学校 新田祥子)

わが町で 見上げる青く 澄んだ空 世界の果てまで つながっている

(新城市立作手中学校 真木明里)

新時代 今までなかった 世界との 手と手をつなぐ インターネット

(岡山市立操山中学校 瓦谷弘樹)

先生の 高いお鼻に ひとめぼれ 体験授業 英語教室

(近畿大学附属東広島中学校 岡崎純怜)

優秀校賞

■高等学校

三重県立松阪高等学校 長野県豊科高等学校

■中学校

常滑市立青海中学校 愛知産業大学三河中学校

5. 3回の国際理解短歌コンテストを終えて

5-1. 応募短歌

3回にわたるコンテストに応募された短歌総数は、12,895首であった。学校単位で応募してくれた短歌の中には、明らかに渋々作ったと思われるような作品も数多く見られたが、授業の一環として作成された以上やむを得ない事である。指導していただいた教員の方々の熱意と尽力に頭が下がる思いである。「ゴミのような短歌」と形容する審査員もいたが、事務方としてはどのような短歌も数字の上では大変感謝に値するのである。応募作品全部が秀作であるはずが無く、多数の応募があったコンテストは成立するのである。

こうした遊び半分、ふざけ半分の短歌が多いのが事実である一方、中学生、高校生の応募作の中にはきらりと光る秀作があるのもまた事実である。入賞した作品はいずれも審査員の心を動かした若い世代の輝いた感性によるものである。

一次審査は、学生審査委員と教職員委員の合計点で判断したが、大学生の斬新なセンスと教職員の高い人生経験が微妙にバランスを取って入賞作品が選定されている。筆者自身は、頭で考えたこうした短歌よりも、身近で発生する小さな国際体験が表現されている下記のような短歌に好感がもてた。

「朝起きて、受信メールは、From UK 辞書を片手に ENGLISHモード」

(第2回高校生部門最優秀賞 長野県飯田風越高校 知久希美佳さん)

「ホームステイ 写真をみるたび 考える ちゃんと家族に なれていたかな」

(第3回中学生部門最優秀賞 碧南市立中学校 小栗末樹子さん)

いずれにしろ、若い世代がこの短歌コンテストに応募することで、国際情勢や世界の平和を考える契機になってくれたとしたら、これ以上嬉しいことはない。

大学生・一般部門は、中部大生が頑張ってくれた。国際関係学部の学生は、これからも積極的に海外の現場に出て、思いを三十一文字に込めてほしい。

第2回、第3回の最優秀賞は、大阪の安藤知明さんが2年連続で受賞した。第3回審査終了後にわかったことだが、安藤さんは40年前にアフリカで青年海外協力隊員として活動し、60歳を過ぎた今でも開発途上国を見つめ続けている。短歌の秀逸さというまでもなく、そうした関心の継続は並大抵のことではない。

「青春は 今この時と アフリカで 教壇に立つ きみ輝かし」

(第2回大学生・一般部門最優秀賞 安藤知明さん)

5-2. コンテストの意義と成果

当初は、500首も集まれば成功と言われた国際理解短歌コンテストも、関係者の努力により、5,000首を越えるまでに成長した。筆者自身は第1回から応募数10,000首を目標にしていたが、実施体制や広報体制などを勘案すると、良くぞここまでといった思いが強い。

一方、当初掲げていた二つの課題、「セントレア開港と『愛・地球博』の開催を契機にして、地域の国際化推進を図る」と「少子化が進む中、高校生を中心とした若い世代の掘り起こし」に対して、どのような成果を挙げたのだろうか。

大学生・一般部門からの応募は回を重ねるごとに減少したが、同部門の半数は、教員指導により中部大生が応募してくれたものである。一部の熱心な教員が講義の一環として応募の促進を図ってくれたため、応募の減少に歯止めがかかっているが、学部全体としての盛り上がりが必ずしもあるとはいえない。

中部大生の応募が半数近くを占めるのは主催校として当然とするも、本来ならば一般の人々や他大学の学生からの応募に期待したいところである。地域社会の国際理解促進を図ることを目的に掲げた以上、人々への情報の提供は必要不可欠なことである。しかし、第1回は好意的にとりあげてくれたマスコミも回を重ねるごとに関心が低下し、第3回にいたっては、短歌コンテスト開始の際も、また入賞者作品が発表された際にも、地元紙すらとりあげることはなかった。(『ODA新聞』のみ、募集を取り上げてくれた。)そのため、外部の関心を高めることはできず、結果的に応募数の減少を招いた。

高校生や中学生への働きかけは、ポスター、チラシの配布・送付で主に学校単位での応募を広報部経由で勧奨した。実際に中高生の応募の大半は、国際理解教育に熱心な教員の指導による学校単

位の応募である。第3回は高校生2,838首、中学生2,187首とそれぞれ過去最高の応募数を記録したが、数十首、100首単位で応募してくれた学校が多く、実は期待するほど応募校の数は多くはない。

下伊那農業高校の教員で、自らも第1回大学生・一般部門の最優秀賞を受賞した菅沼節子さんのような、中・高校の熱心な教員が減少すれば、応募数はいとも簡単に激減するのである。菅沼さんが指導し、入賞を果たした高校生の作品は、毎日新聞城島徹記者の『私たち、みんな同じ一記者が見た信州の国際理解教育』(一草舎、2006年)に本短歌コンテストの紹介とともに収録されている。

本国際理解短歌コンテスト実施の狙いには、減少しつつある受験生の確保という側面もある。本短歌コンテストの実施が受験者増に即結びつくとは思えないが、現に過去2年間受験者の減少傾向に歯止めがかかったという事実はない。

5-3. 実施体制

国際理解コンテストは、学部主催のプロジェクトである。プロジェクトとは言うまでもなく、一定の期間を設定し、達成目標・目的を掲げその目標・目的に沿って、人、金、物を投入するものである。しかし、本国際理解短歌コンテストは、明確な目標がないまま発足したため、実施期間の設定もなく、毎年度初めに実施の可否を検討してきた。そのため、長期的視点に立つことができず、いわばやつつけ仕事の側面があったことは否定できない。また人、金に関わる実施体制も関係各部署にまたがり、プロジェクトを任された者としては、当初大きな戸惑いがあった。少ない予算と人員で大きな成果を期待されるのも、辛いものである。

6. 最後に

国際理解短歌コンテストは小さなプロジェクトであるが、全国的規模で実施している本大学の数少ないイベントのひとつである。国際理解短歌コンテストの3回にわたる実施は、応募してくれた方々の存在があって始めて成り立ったものであり、心より感謝いたしたい。とりわけ学校単位で応募してくれた中・高校の指導教員の皆さんには、お礼をのべるとともに今後の協力関係を検討していきたいと思っている。

後援・協賛団体の方々にもご協力をいただいた。とりわけ独立行政法人国際協力センター中部国際センターには、ホームページ、メールマガジンでの広報、また所長に最終審査をお願いし作品集の講評をいただいた。

小さな試みとして発足した国際理解短歌コンテストだが、応募してくれた人々や作品を読んでもくれた人々が、世界で発生している様々な問題についてさらに関心を高めていただくことができたのであれば、コンテストに携わった一員として幸いである。

(注：教員の肩書きは当時のものである。)